

20190925 「ヒガンバナの花は葉を知らせん」

ヒガンバナ:ヒガンバナ科・ヒガンバナ属 開花期7~10月 多年生球根性植物 原産地は日本・中国

例年秋の彼岸の頃を中心にして開花するヒガンバナだが、今年は夏の暑さの継続の影響なのか、いつもなら見られるヒガンバナの姿が少ないように思われる。緑の草の中に鮮やかな朱色のヒガンバナの花は、この季節の風物詩なのだが…。これから秋の気配が濃くなるに伴って、あちこちで急激に咲き始めるかもしれないけれど。

ヒガンバナは花が咲いているときは葉がなく、葉が茂っているときには花がない。それで「**葉見ズ花見ズ**」とか「葉ナシ草」などといわれる。中国では葉と花を同時につけないものを忌み嫌う習慣があり、それが日本にも影響を及ぼして、美しい花でありながら、ヒガンバナは嫌われ者になったのかもしれない。

ヒガンバナは葉に先立って、9月ごろ 30~50cm ぐらい伸びた花茎の頂に、5,6 個の真っ赤な花を輪状につける。6 枚の細長い花被片は外側に反り返って、やはり赤い 6 本のおしべと一本のめしべとが、長く糸のように外に突き出てくる。たくさんの花がいつせいに咲いても、日本のヒガンバナは 3 倍体で実はできないが、鱗茎が分球して繁殖する。花が終わるとスイセンのような細長い鮮緑色の葉が、根元からたくさん伸びてくる。葉は翌年の春に枯れるまでの半年間、柔らかい冬の日差しを浴びて光合成を行い、鱗茎に養分を送って貯えたり、新しい鱗茎を育てたりという生活史を繰り返す。

秋が近づくまで地表には何も生えてこないが、夏の終わりごろから枝も葉も節もない花茎が地上に飛び出し始める。その先端に花序が付きだす。花をよく見ると、つぼみが固い時期(グー)、つぼみが間もなく開花する時期(チョキ)、そして見事に開花(パー)の工程がはっきり区分できる。

ヒガンバナが毎年秋の彼岸のころに決まって開花するメカニズムの一つに、夏の地温の低下が挙げられる。花芽は葉が枯れる 5 月上旬に鱗茎内に形成され、地温が 25℃ぐらいになる 8 月上旬から花茎が伸び始め、ちょうど彼岸のころに開花する仕組みをもっている。

ヒガンバナはよく墓地などに生えているので不吉だとか、花の色から火事を連想したりするので、庭に植えるのを嫌がる地方もあるようだ。しかし、アメリカに輸出されたものは「スパイダー・リリー」(クモのようなユリ)と呼ばれ、個性的な花に人気があるという。ヒガンバナのように冬の間には生長する球根のグループには、チューリップ、ヒアシンス、クロッカスなどがあり、乾季と雨季との差が激しい地中海性気候地域が原産のものに多く見られる。

ヒガンバナの鱗茎には、リコリンという**アルカロイド系の毒素**が含まれ、そのまま食べると激しい嘔吐作用があるが、鱗茎の毒は水で晒すことによって無毒となり、多量のデンプンが得られるので、古くから飢饉のときには、それを食用にしてきたそうである。また、このデンプンは強力な糊としても利用され、壁土に鱗茎のすりおろしたものを混ぜて塗ると、ネズミの害を防げるとも言われている。

ヒガンバナは呼び名も「曼珠沙華」「幽霊花」「死人花」「火事花」「火炎花」「手腐花」「シビレ花」「狐の松明」「イッポンカッポン」「ヒイヒリコッコ」など、方言だけでも 1000 以上もあり、それだけ身近な植物であったことがうかがえる。



仏隆寺のヒガンバナ



開花(グー)



開花(チョキ)



開花(パー)